

江戸時代

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

大坂夏の陣(1615年)によって徳川氏が覇権を握って以来、日本は明治維新まで約250年の間、戦乱のない平和な時代を迎えます。その中にあって京都は、町衆の経済力を背景に発展を続けます。やがて商業の中心は大坂に移りますが、現代にも受け継がれている「西陣織」や「京焼」などの洗練された伝統産業は、以後も他の近世都市の追随を許さなかったのです。寛永から元禄年間(17世紀前半から18世紀初頭)にかけての上方文化は、このような町衆を中心と

して、公家や多くの諸大名と一体となって築かれていきました。

京都の発掘調査では、この時代から調査が始められます。これまでに、二条城内をはじめとして公家屋敷跡では御所の北側にある二条家、武家屋敷跡では蛤御門前の水戸藩邸跡(写真1)や、高倉通六角下る松山藩邸跡、豪商屋敷跡では東洞院通姉小路下る後藤庄三郎邸跡や京都府庁西側の茶屋四郎次郎邸跡などが調査されています。また、この時代の繁栄を支えた庶民の町屋跡も、烏丸通五条上

る悪王子町や、柳馬場通竹屋町下る五丁目、日暮通下立売上る分銅町などで調査され、その様子がわかってきました。

これらの遺跡からは、大都市であった京都を物語る多種多様な遺物が出土しています。陶磁器では、京焼をはじめとして、伊万里・唐津・備前・美濃・瀬戸など日本の焼物はもちろんのこと、中国・朝鮮、タイ・ベトナムなどの東南アジア、遠くはヨーロッパの陶磁器なども少量出土しており、鎖国下でありながら海外の製品が京都に



写真1 水戸藩邸跡の石組施設



写真2 悪王子町出土の人形・玩具など



写真3 五丁目出土の工芸品

略年表

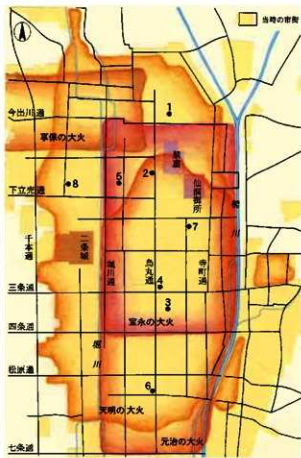
桃山時代	江戸時代				明治時代
1603 1615 徳川家康 征夷大将軍となる 大坂夏の陣	1639 この頃から京焼が作られる	1706 1716 1730 元禄文化 享保の大火(西洋焼酎) 享保の改革 宝永の大火	1772 田沼重次、老中となる	1788 1789 天明の大火	1841 1853 1864 1867 文化文化 天保の改革 大政奉還 元治の大火(じんどん焼酎) ペリー、浦賀に来る
	 京焼 仁清鉢	 京焼 古澤水鉢		 伊万里焼 染付鉢	



写真4 天明火災で処理した土壌の断面 松山藩邸跡



写真5 火災で焼失した町屋 五丁目
木舞（壁の下地に組んだ竹）が密封された状態で残っていた



江戸時代の京都と火災の範囲

- 1 二条家 2 水戸藩邸 3 松山藩邸 4 後藤庄三郎邸
5 茶屋四郎次郎邸 6 悪王子町 7 五丁目 8 八幡町

もたらされていたこともわかってきました。

また、先に述べた悪王子町の調査では、江戸時代後半の遺構から多くの人形・玩具・箱庭道具などの土製品が出土しています（写真2）。土人形は京都が発祥の地とされており、深草から伏見にかけて土細工の焼物屋が多かったことは、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』にもみられます。土人形には縁起物や呪いなど民俗信仰に由来するものが多く、人々のほのかな期待や願いが込められていたのでしょう。

五丁目の調査では、竹屋町通・富小路通などに面して19軒以上の町屋を検出しました。それぞれの町屋は、間口が狭く奥行きがあり、通り庭に井戸やかまどが並び、便

所や坪庭、土蔵が奥まったところに設けられていました。その姿は、現在残っている町並と、さほど変わらないものですが、同じ場所からは鏡鋤型や増場などの鍛冶道具も出土しており、住まいと作業場が一体となった生活であったこともわかりました。また、この五丁目からは化粧道具を含む様々な工芸品（写真3）も出土しており、庶民の暮らし振りがしのべられます。

分銅町の調査では江戸時代中頃の土取穴を多数検出しました。土取穴は建物の壁土に用いるため聚楽土を採取したもので、ここでは市街地が西側に拡大する様子うかがうことができました。

江戸時代の調査では、しばしば大量の砂礫や、焼土を含む整地層・

火災整理土壌などが検出されます。これらは、たび重なる鴨川の氾濫や火災の痕跡です。なかでも、宝永五年（1708）・享保十五年（1730）・天明八年（1788）・元治元年（1864）の大火は被害が甚大でした。しかし、これらの洪水や火災の痕跡層は、遺跡の年代を決定するための重要な情報を提供してくれるのです（写真4・5）。

京都は平安時代以降、現在まで連続と都市生活が営まれた所です。「平安京」としての京都はよくとりあげられますが、江戸時代の京都も発掘調査することで、文献や伝世された文化財ではわからなかった歴史や人びとの暮らしを、より詳しく知ることができるのです。（能芝 勉）